

日本語副詞の構造的多義

Structural Homonymy of Japanese Adverbs

児玉望

Kodama Nozomi

はじめに

本稿では、副詞のさまざまな用法の同義性の判定に、副詞が出現する統語構造・音韻構造上の位置の異同を考慮することを提案し、いくつかの日本語副詞のこの意味での多義(構造的多義)を例示する。あわせて、このような多義の存在が統語論全体にとってどのような意味をもつかを考察する。Ernst(2002: 43)は、英語の同一と見られる副詞が構造上の位置に応じて(規則的に)異なる意味をもつことを、語彙として異なるかどうかの判定と関わらず *homonym* と呼ぶことを提案した。「構造的多義」とは、この考え方に立つ多義性のことである。

1. 副詞と統語論

品詞としての副詞は、統語論研究において長らく周縁的な扱いを受けてきた。Chomsky(1957)が次の有名な例文でいわゆる統語論の自律性を例示したことは、これを端的に表している。

(1) Colorless green ideas sleep furiously.

この無意味文は、Chomskyにより「文法的である」とされる。つまり、*sleep furiously* のような構造が容認可能かどうかは、意味解釈の可能性によって決定されるものであり、統語論上の(母語話者の言語能力 *competence* によって判断される)文法性の問題ではない、とするのである。このような、しばしば「選択制限 *selection restriction*」と呼ばれる現象は、日本語の副詞にもしばしば観察される。たとえば、「じろじろ」と「あくせく」は共に動詞を修飾する副詞であるが、これらの双方が分布しうる環境はきわめて限定されており、共に動詞句内部に現れるという以上の共通の特徴は見出し難い。これらの副詞の記述にとってより重要なのは、見ることの様態、働くことの様態といった意味上の特徴であり、どんな動詞と共起するかはこの意味によって導かれると考えれば、特に統語論上問題にすべき

ことはないはずである。

一方で、統語論研究が明らかにした副詞による統語的な性質の違いも存在する。副詞が意味上修飾しているものは何か、あるいは、どんな統語論上の範疇とどんな構造を構成するか、といった観点での「文副詞」あるいは「話し手志向の副詞」、「主語志向の副詞」、「様態の副詞」といった区別である。しかし、このような性質の違いは、逆に言えば、統語的性質の異なるものを同じ一つの範疇として取り扱う必要があるのか、という、本来曖昧で「残り物」的に見られがちな「副詞」の定義の問題を浮き彫りにすることでもあり、統語論研究においてこのような統語的性質の共通な副詞のみを取り出して分析する、という傾向を促進した。ただし、副詞個々のレベルでは、同じ副詞が異なる環境で異なる解釈を受ける、ということも注目された。

(2) a. Rudely, she left.

b. She left rudely. =Ernst(2002: 43) (2.9)

2a の rudely は、文副詞としての解釈、つまり、"she left"で指示される事態に対する話し手の評価という解釈が可能であるが、2b ではこの事態を構成する主語の動作の様態、という解釈のみが許される。この二つの意味での rudely は同じ語の二つの用法と解釈すべきなのか、同音異義の二つの語であるのか、あるいは（音韻構造を考慮すると）同音ですらない異義なのか、といった問題が存在することが予想される。この rudely のように、意味の点では関連するが統語論上の位置づけが異なる副詞はほかにも数多く存在し、「副詞」という範疇はこのような「派生」的關係でゆるやかに結び付けられたネットワーク、というようにも見るができる。

GB 理論で採用された X'理論に基づく構文理論は、基底における XP→XP Adjunct（あるいは X'→X' Adjunct)の付加構造を、X'→X YP のような補語構造と区別するものであるが、XP の種類が文（命題レベル・談話レベル）であるか動詞句であるかを問わず Adjunct として機能する語群として、(英語では可能な補語位置に出現するものを除いた)「副詞」を「付加詞」として再び統一的に取り扱うことを可能にした。1980 年代以降、この観点から総合的に副詞の統語的性質を論じる理論研究が生まれ、生成文法で仮定される句構造の変遷に応じて解釈を改めながら、副詞の「文法性」をどのように規定するかが提案されている。Cinque(1999)は、もっとも統語論寄りの副詞研究であり、副詞の XP 修飾を XP 指定部への移動と説明し、この XP を構成する機能的な主要部 functional heads (各種叙法、時制、

アスペクト、態)の階層を句構造側に仮定するものである。いわば、副詞の主として語順に関する統語的特徴を根拠に、句構造全体を構築する、とでもいうべき視点である。これに対して Ernst(2002)は、同様に副詞の語順上の特徴を統語的に(句構造文法の道具立てで)説明するものであるが、異なる構造に現れる同音の副詞を別の語と見なすことに慎重である。文副詞・様態副詞といった「陳述副詞 predicational adverbs」が共有する「修飾」的な関係を直接的な統語構造としてではなく、論理的な意味構造上の特徴として定義しておき、このような意味的特徴をもつ語が、CP, IP, VP 各指定部, VP 内部に付加あるいは移動して、それぞれの位置で意味的關係を満たすかどうかに応じて文法性が決定されるとするモデルを提案する。副詞の性質のみによって動機付けられた句構造の仮定がない点で Cinque(1999)とは対照的である。

日本語副詞の研究では、「情態副詞・程度副詞・陳述副詞」といった意味による分類に長い研究の蓄積があるが、構文論的視点を取り入れた包括的な副詞分類研究として、仁田(2002)がある。仁田氏は独自の統語構造をたて、たとえば、文の成分を中核的成分(主語・述語・補語)と周辺の・付加的な成分に分け、中核的成分である述語成分と共に現れる「命題内修飾成分」としての副詞を取り上げて階層的な分類を試みている。命題内には 3a のような階層が仮定され、3b と大まかな対応を成すことが示される。

(3) a. [格-動詞]ヴォイス]アスペクト]肯否]テンス]

b. [時の状況成分[頻度の副詞[時間関係の副詞[様態の副詞]]]]

「様態の副詞」の下位と上位にはさらに、主体や対象の変化にかかわる「結果の副詞」、アスペクトを中心とする時間の中での事態の出現・存在・展開のありように関わるとされる「程度量の副詞」も置かれる。周辺の・付加的な文の成分として分類される「モダリティー修飾成分」としての副詞は取り扱われない。また、工藤(1977)が「限定副詞」と呼ぶものも扱われておらず、一例のみ言及される「たった」は「モダリティー修飾成分」に分類されている。

きわめて多くの副詞(あるいは副詞句)についてはほぼ網羅的に記述し、同じ類の副詞でも少しずつ分布にずれがあることにも言及した丁寧な労作である。ただ、「文の構造」(のうちモダリティーを除いたもの)として提示されている 3a が統語構造であるのか、文の表している意味の論理的構造であるのかが判然としない。この印象は、各副詞の記述での統語的分析が主として動詞との共起に限定される点や、3a と 3b の微妙なずれが説明されて

いないことによるものかもしれない。各副詞はいずれかの「統語的」分類に分かたれ、英語副詞研究で問題にされるような構造的な「同音異義性」には、(たとえば「よく」のような) 個別の副詞の例を除いてはまとめて言及されない。ただし、工藤(1983)で言及された「叙法的共起制限」と関連するとみられる程度の副詞の意味類型「評価性」の考察では、本書の対象外であるモーダル副詞との関連が示唆されており、また「動き状態の副詞」に関しても「評価的捉え方」により統語的な共起制限に差が出ることが述べられている。

2. 音韻構造と統語構造

副詞の意味記述において、アクセントの違いは考慮されてきたといえる。たとえば、副詞「もう」の無核(平板)型の語形は、いわゆる「累加」の用法として他とは区別されている場合が多い。ここではまず発展的に、この音形がどんな音韻構造に現れるかを考察し、さらに「もう」の他の用法と意味だけではなく統語的性質においても異なることを論じる。

平板型の「もう～」は、後続の語(しばらく、すぐ、少し、一人、二三回、千円、そろそろ、あと)と音韻句として統合する。東京方言ではこの音韻句は(1個以内の核をもつ)アクセント句としても解釈可能な形であり、全体として一語化している疑いがあるが、後続の語のアクセント句としての性質(核の有無と位置)は変更されず、何らかの複合語規則が関与していると考えられる積極的な証拠はない¹⁾。ただし、「もう～」に語ではなく句が後続すると解釈できる場合は、{もうほんの少し}、{もうあと}{～}などきわめて限られており、複合語ではないとしても二語構造(連語)として解釈できる緊密な統合を成している。

累加の意味と連語的構造の点で似ていると考えられる「あと」²⁾は、後続の語と音韻句として統合せず二句構造を構成する。この二語構造と二句構造の違いが関与している可能性のある統語的性質の違いもある。もっとも目立つのは、音韻句統合した「もう～」の語形では、副助詞「も」の接続が限定される、ということである。

- (4) a. {もう一人も}{来なかった}
b. {あと}{一人も}{来なかった}
c. {あと}{一人も来なかった}
- (5) a. {もう千円あれば}{買える}
b. {もう千円もあれば}{買える}
c. {あと}{千円もあれば}{買える}
d. {もうあと}{千円もあれば}{買える}

- (6) a. {もう三日ある}
 b. *{もう三日もある}
 c. {あと}{三日もある}
 d. {もうあと}{三日もある}

4aの「もう一人」は「もう一台」「もう一個」「残るもうニコマ」などと同様、特定指示をもつ代名詞的用法であり、この場合は名詞句(DP)に接続する「も」と同じ解釈が可能である。その他の「もう～」にはこれ以外のさまざまな用法の「も」のうち、全称否定のと多数強調の「も」が接続できない。これに対し、「あと」と「もうあと」は後続する語に「も」が付加されている場合の「も」の解釈に関与しない。また、「もう～」は「まだ」と共起できる点で他の「もう」と大きく異なるが、語順が「まだもう」で固定している。これに対して、「あと」は「まだ」のほか、後続する語と何らかの直接的な統語的關係をもつ他の語との間で語順が入れ替え可能である。7dの{僕には}と{あと}を入れ替えると、「あと」に接続詞的な意味が生じるが、それ以外の他の3項は入れ替えてもほとんど意味が変わらない。

- (7) a. {まだ}{もう三日ある}
 b. {まだ}{あと}{三日ある}
 c. {あと}{まだ}{三日ある}
 d. {僕には}{あと}{休みが}{今日を入れて}{まだ}{もう三日ある}

「もう～」は、二語構造あるいはアクセント句統合を起こしている点で、統語的に他の「もう」と区別されていることがわかりやすい例であるが、音韻句として統合しているかどうか副詞の意味に影響する例も多い。「ずっと」は、状態述語を修飾する場合に「程度の副詞」としての用法をもち、「時間副詞」としての用法と衝突を起こすことがあるが、音韻句構造である程度の意味の特定ができる。

- (8) a. {熊本は}{ずっと暑い} (程度＝時間)
 b. {熊本は}{ずっと}{暑い} (時間)

8aは、程度副詞としての解釈と時間副詞としての解釈の間で両義的であるが、8bは時間

副詞としての解釈しかもたない。つまり、「ずっと」が程度副詞と解釈されるためには、修飾される語と音韻句として統合していることが必要条件であると考えられる。ただし、比較対象句が文中に現れているときは、この条件が緩和されるように見える。9b では、比較対象句が明示されていても「ずっと」は時間副詞としての解釈が優先されるが、9c では程度の副詞としての解釈だけが可能である。

- (9) a. {インドより}{ずっと熊本が暑い} (程度=時間)
 b. {インドより}{ずっと}{熊本が暑い} (時間>>程度)
 c. {インドよりずっと}{熊本が暑い} (程度)
- (10) a. {このところ}{ずっと熊本が暑い} (時間=程度)
 b. {このところ}{ずっと}{熊本が暑い} (時間)
 c. {このところずっと}{熊本が暑い} (時間)

10a では、時間句の存在にも関わらず「ずっと」の程度の副詞としての解釈が可能である。9c と 10c では解釈が一方に固定されており、「ずっと」が直接的な統語関係をもつのは同じ音韻句内の「インドより」「このところ」であるように思われる。この語順では「ずっと」が比較対象句/時間句を補語として取っているようにも見えるが、{ずっとインドより}、{ずっとこのところ}の語順も、インターネット検索では数多く見られ、修飾関係や補語関係とは異なる何らかの統語関係を認める必要があるのではないかと考えられる³⁾。

- (11) a. {インドよりずっと}{東京よりは多少}{熊本が暑い}
 b. {インドより}{ずっとだ}

「ずっと」と同じく程度の副詞である「もっと(X)」は、被修飾語と音韻句を構成する場合に(X である)比較対象が文脈にあるか、暗黙に了解されていることを含意するが、音韻句を構成しない場合には、「もっと」が「発話場面内で確認できる(X ではない)比較対象と異なる」という含意となる。

- (12) a. {太郎も背が高いが}{次郎は}{もっと背が高い}
 b. {太郎はそれくらいだが}{次郎は}{もっと}{背が}{高い}
 c. {次郎は}{もっと}{ずっと背が高い}

d. {次郎は}{逆にもっと}{背が}{高い}

単独で音韻句を構成する「もっと」は、{もっと}{別の機会}のように、「程度副詞」からは逸脱した範疇指示的な用法をもつが、「正反対」「90度右」のように単独で指示対象が特定できる語とは共起しない。

「もっと」は「程度」だけでなく「量の副詞」としての用法ももつが、この場合も被修飾語と音韻句を構成する。単独の音韻句{もっと}は、発話時との違いを含意する過去や未来の（不特定な）事態を表示する解釈をもち、やはり「量」からは逸脱する。比較対象が発話場面内で確認できる何かであり、評価者が話し手である、という点でモーダルな用法であるといえる。(13b, d)

(13) a. {太郎は}{もっと笑った}

b. (前は){太郎は}{もっと}{笑った}

c. {もっと太郎に笑われる}

d. {もっと}{太郎も}{笑えばいいのに}

「程度・量」の副詞が単独で音韻句を構成して「程度副詞」としての用法から逸脱する典型例として、「もうちょっと」「ちょっと」がある。「もうちょっと」の分布は「もっと」と非常によく似ているが、副助詞「は」を伴うことができる点で異なる。「もうちょっとは」「ちょっとは」は、後続の語と音韻句統合し、典型的な程度副詞・量副詞の用法をもつ。「は」のつかない「ちょっと」が単独で音韻句を構成する場合(15a-f)には、「程度副詞」としての解釈からはほど遠い、話し手の何らかの心的状態あるいは聞き手への訴えを反映すると感じられる用法となる。

(14) a. ??{太郎は}{もっとました}

b. {太郎は}{もうちょっと (は) ました}

c. {太郎は}{ちょっと (は) ました}

(15) a. {ちょっと}{親戚に不幸があつて}

b. {ちょっと}{どういふこと}=R%

c. {インドに}{ちょっと}{3年ほど行ってきた}

d. {ちょっと}{ごめんなさい}

- e. {悪いんだけど}{ちよつと}{今日は}{帰ってもらえない}=R%
- f. *{太郎は}{花子に}{ちよつと}{その日は}{帰ってもらった}

聞き手からの働きかけに対する順当な応答に「ちよつと」が用いられることはない。16dは頼まれていないことをする場合にも使われる表現である。16eが応答に用いられるのは、問いかけが「ちよつと」で話し手がその意味を理解できなかつたと意思表示する場合に限られる。それ以外で応答に使われると、会話の流れを中断して話し手の新たな問いかけを予告する効果をもつ。

- (16) a. *{ちよつと}{わかりました}
- b. *{ちよつと}{そうですか}
- c. *{ちよつと}{お引き受けします}
- d. {ちよつと}{やらせていただきます}
- e. {ちよつと}{なに}=R%

評価の語を修飾する「ちよつと」は、否定的あるいは予想外の評価の場合に、程度副詞でない形で現れやすいように見える。対応する肯定的評価では、「ちよつと」よりは「たいへん」「まったく」などが程度副詞として音韻句を構成するか、あるいは同様に単独音韻句の形で現れやすい。これらの副詞には「ちよつと」も程度副詞として使われやすい。

- (17) a. {ちよつと}{唐突だ} vs. {まったく({})順当だ}
- b. {ちよつと}{乱暴だ} vs. {まったく({})丁寧だ}
- c. {ちよつと}{派手だ} vs. {まったく({})お似合いだ}
- d. {ちよつと}{月並みだ} vs. {まったく({})独創的だ}
- e. {ちよつと}{凡庸だ} vs. {まったく({})非凡だ}
- f. {ちよつと}{ひどすぎる} vs. {まったく({})たいしたものだ}
- g. {ちよつと}{見当違いだ} vs. {まったく({})その通りだ}

「ちよつと」と「まったく」は、否定語との呼応表現としても共通点をもっている。この場合、どちらを用いるかの対立は必ずしも程度の違いとはいえないように感じられる。このほか、「まったく」も、話し手の不満を表明すると思われるモーダルな独立音韻句用法

をもつが、「ちょっと」との分布の違いについてはよくわからない。

以上、「程度・量の副詞」が異なる音韻構造で違う意味をもつ場合について述べた。音韻句統合は副詞と被修飾語の隣接を必要条件とするのに対し、独立音韻句はこのような隣接を条件としない、という点で、音韻構造の違いは実は統語構造の違いを反映していると考えることができる。

このような音韻構造の違いによる意味の違いは、「程度・量の副詞」以外の副詞でも観察される。たとえば、時間副詞の「もう」「まだ」や、モーダルでない用法では頻度の副詞の一種と考えられる「やはり／やっぱり」も、以下のような対立例がある。

(18) a. A (お嬢さん) {もうだいじょうぶです}

b. B (いえ) {もう}{だいじょうぶです}

c. A (え?) {もうだいじょうぶなの}=R% / (え?) {もう}(=R%)

(19) a. A (インド行き) {やっぱり}{やめた}

b. B (A が) {やっぱりやめた}

c. C (A も) {やっぱりやめた}=R% / {やっぱり}(=R%)

(20) a. {もう}{だいじょうぶなの}=R%

b. {やっぱり}{やめる}=R%

「もう」と「やっぱり」の共通点は、被修飾語と音韻句統合を起こした場合の疑問文は、事実上副詞単独での問い返しとほぼ同義となり、質問と言うよりはむしろ評価の機能をもつという点である。「{もう X}」では、「近過去または近未来において X という事態が出来るような何らかの事態の変化があった／ある」ことをこの「もう」が示し、「{やっぱり X}」では、「先行して発生したまたは想念上発生が予想された事態 X が繰り返された／る」ことをこの「やっぱり」が示す。単独での問い返しで確認されるのはこの前提の中の一部であり、文脈によってモーダルな解釈が発生する。これに対して、「{もう}{X}」と「{やっぱり}{X}」では、(話し手が想定する／確認したなんらかの変化や変更を経た上での)話し手の発話時の判断という意味を X に付け加える点でモーダルであるといえる。20a-b の疑問文では、この副詞部分は話し手が発話時において聞き手と共有すると考える前提(『さっきはだいじょうぶでなかった』『やめるという選択肢をとる可能性があった』)であり、この部分は問われていない。

3、命題と統語構造

様態の副詞の意味変異においても、統語論的な性質の区分、すなわち構造的な多義の存在が疑われる現象がある。たとえば、しばしば様態の副詞の代表に挙げられる「ゆっくり」の多義がそうである。仁田(2002: 102ff)はこの副詞を「様態の副詞の中核」である「動き様態の副詞」のうちの「動きの早さをより純粋に表すもの」と分類する。共起する動詞の幅が極めて広いことを述べ、この副詞が「動きの経過の早さが遅いこと」を中核として表し、派生的に「動きの勢い・強さが弱い」あるいは「所要時間の長さ」につながるとして、この副詞の意味を連続的な変異として捉えている。しかし、「所要時間の長さ」の意味類型は、統語的な性質の点でも他の類型と異なるように思われる。

- (21) a. 太郎は事故のあとゆっくり仕事を休んだ。
b. ?馬はレースのあとゆっくり厩舎で休んだ。
c. ??新幹線は事故のあとゆっくり運行を休んだ。

状態変化・位置変化など変化を含意しない述語を修飾する「ゆっくり」は、時間的意味ではもっぱら経過時間の長さを意味すると考えられるが、この場合、経過時間が長いことを（主観的に）判定できる主語が必要である。

- (22) a. 五分しかない休憩時間でもゆっくり煙草を吸った。
b. 仕事を辞めたらゆっくりインドで暮らしたい。 cf. *インドに住みたい
c. 喫煙はゆっくり家族の健康を蝕む。 cf. ??喫煙者は

述語の事象は、その過程における時間の経過を有生の主体が自覚できるものでなければならない。この制約は、22c のような、対象変化を含意する事象でも共通と思われ、22c に有生な主語を置くとこの事象が主体の作為であるような印象を受ける。とすれば、この副詞は仁田氏の「主体状態の副詞」としても解釈可能な用法をもつことになる。

このような用法は、ほかにも統語的な特徴の点で「純粋な動き様態」との違いがある。たとえば、(狭義の) 程度副詞による修飾が不自然になりやすい。

- (23) a. ??{休みの日は}{とてもゆっくり子供と遊んだ}
b. ??{もっとゆっくり食事を楽しめば}=R%

c. {もっと}{ゆっくり食事を楽しめば}=R%

また、「ゆっくり」は対象変化の経過の早さを表現できるが、使役構文のような複文構造を取らない限り対象の状態の所要時間の長さを表現できない。

- (24) a. 工場でスープをゆっくり加熱した。
b. *控え投手をゆっくり温存した。
c. 控え投手をゆっくり休ませた。

「ゆっくり」の上記の二つの意味は、命題の事象の「変化」のあり方を特定する狭い意味での「動き様態」と、動作主体としての人間の行為についてその心的状態を含めて特定する意味であるということが出来る⁴⁾。前者では、音韻構造上も非修飾部と音韻句統合をほぼ義務的に起こすように見える。後者は、「ゆっくり過ごす」のように動詞が意味的に空に近い場合を除き、音韻句統合は文脈に依存すると見られる。

さらに、同じく専ら人間の行為の様態を特定する副詞として、「じろじろ」「きよろきよろ」のような、「見る」ことの様態を特定する副詞について、その統語的性格を論じる。仁田(2002)では、「動き様態の副詞」に分類されると考えられる。これらの副詞には強い選択制限があり、「見る」「眺める」「見回す」「観察する」「覗く」といった視覚に関わる動詞としてのみ共起するように思われるが、インターネット検索例では、次のような必ずしも視覚動詞とはいえない用例もある。

- (25) a. 以来、ネット書店のデータをじろじろ確認するクセができました
b. 一度周囲をきよろきよろ確認すると、彼は今度は慌てて走り出した。

「確認する」は、必ずしも視覚によるとは限らない動詞であるが、その手段として視覚が用いられていることは副詞によって特定される。いわば、「じろじろ見て」「きよろきよろ見回して」と同等の機能をこれらの副詞が果たしていることになろう。また、「じろじろ」「きよろきよろ」は、名詞「視線」と統語関係に立つ分布もある。インターネットの検索例では「じろじろ視線」「きよろきよろ視線」といった複合語形も目につくが、容認度が高いと思われるものには次のような例がある。筆者が読むときの音韻句の区切りを付記する。

(26) a. {道行く車の人から}{じろじろ}{視線を感じました}。

b. {麻貴は}{途方にくれて}、{思わずきよろきよろ}{視線を泳がせていた}。

「じろじろ」「きよろきよろ」は、人が何かを見るという事象のうちで、専ら「視線」に関する部分を特定する副詞であるといえる。このような意味限定は、「見る」と共起する場合にも発揮される。「見る」ことは、経験者としての主体が何らかの影響を被ることを含意しやすいが、その側面は「じろじろ」や「きよろきよろ」で修飾された「見る」からは抑圧される。28b では、テレビが点いているかどうか（主体への影響の源泉となるかどうか）は命題としての真偽に関与しない。目的語は「視線」の帰着点に過ぎないからである。

(27) a. *じろじろ夢を見た。

b. *きよろきよろ夢を見た。

(28) a. 朝からテレビを見た。

b. 朝からじろじろテレビを見た。

c. ??朝からじろじろテレビで駅伝を見た。

「きよろきよろ見る」に至っては、特定の目的語すら要求されない。このように、動詞の項構造にまで干渉する統語関係を、単に「修飾関係」とみなしていいかどうかは検討を要する問題であるように思われる。さらに、「きよろきよろ」には、「修飾関係」すら必要としない「きよろきよろする」という動詞形がある。これに対して「じろじろする」が存在しないのは、「むしゃむしゃする」「どンドンする」が存在しないのと同様、あるいは、このような副詞派生動詞が対象補語を取りにくいという制約があるためかもしれない。

(29) a. *左右をきよろきよろする

b. 普段よりも目を大きくあけ、あちこちきよろきよろしていました。

「ゆっくり」の場合、非修飾形として「ゆっくりだ」「ゆっくりする」「ゆっくりしている」があるが、「ゆっくりだ」と「ゆっくりしている」が速度と人間の行為の双方に使えるのに対し、基本形「ゆっくりする」は専ら人間の行為のみを表し、この用法での副詞と密接な関係にあると考えられる。さらに、関連する語形「ごゆっくり」は、ほぼ人間の行為の用法での「ゆっくり」と共通の事象で用いられるが、「ゆっくり」と異なり、単独で使わ

れて「ゆっくりする」の尊敬命令に近い機能を担う。

このように、命題の中核となる動詞と密接に関係する「様態の副詞」は、語彙的内容の点でも動詞と似た性質を持っており、命題の構造決定にも積極的に関与していることを示した。このような語彙性の高い副詞に対し、Cinque(1999)や Ernst(2002)が機能的副詞 *functional adverbs* と呼び、仁田(2002)が「時の表現の下位類」とまとめたものの例として、時間副詞「もう」の統語的性質について簡単にまとめ、日本語副詞の概観を終える。

仁田(2002)は、時の表現を「時の状況成分」と「時間関係の副詞」に二分し、前者を「事態の外的な時間的位置づけ」すなわちテンスに関わるもの、後者を「事態の内的な時間的特性」、おおざっぱに言ってアスペクトに関わるものとした。「もう」「まだ」は後者に分類される。仁田(2007)もこれらの副詞を「アスペクトに関わる副詞的成分」と呼んでいる。しかし、この分類は仁田(2002)の副詞分類基準に齟齬を生むように思われる。

(30) a. あの頃我々はしばしば喫茶店で長時間話し込んだ。=仁田 2002:203 (6)

b. まだ我々はしばしば喫茶店で長時間話し込む。

c. もう我々はめったに喫茶店で長時間話さない。

30a は、「時の状況成分」と「時間関係の副詞」の作用域の例として掲げられたものであるが、「もう」と「まだ」は「時の状況成分」の位置を占めることができる。実は、他の時の状況成分と共起しない「まだ」と「もう」は、代表的な「時の状況成分」である「今」と分布がよく似ている。

(31) a. *彼は{まだ/もう}日本生まれだ。=仁田 2002:256 (2)

b. *彼は{今}日本生まれだ。

(32) a. 彼は{まだ/もう}前科3犯だ。=仁田 2002:256 (3)

b. 彼は{今}前科3犯だ。

「今」も明示される以上は、「時間の展開の中で、その事態でないものに変わりうる」事態とのみ共起するのである。「もう」「まだ」との違いは、そのような事態変化が必ずしも変化の後と前という二項対立が可能な枠組みで捉えられていない、という点に限る。「今」も「もう」「まだ」と同様に、「変化や運動という動的な事態」と上記のような条件付きの「静的な事態」の両方と共起する。前者のうち完結層 *perfective* の(可算的な)事態と共

起する場合には、テンスに応じて、「発話時」ではなく、「発話時の直前」または「発話時の直後」という過去と未来の状況成分となる。この場合の「今」は典型的には文の他の部分と音韻句を構成するが、この環境では、「いつ～？」の答えとなるようなフォーカスをもつ「今」以外では「今」と「もう」が対立しうる文脈が多く、同じ音韻句内で「今」と「もう」が共起しない。

- (33) a. { (たった) 今駅に着きました }
b. { もう駅に着きました } / { まだ駅につきません }
c. { 今信号が変わります }
d. { もう信号が変わります } / { まだ信号が変わりません }

このような、音韻句として独立しない「今」「もう」は、典型的には刻々と変化する事態を話し手がリアルタイムで報告する場合に現れる。変化の不生起は、同じ音韻構造に現れる「まだ」と時制のない否定形が対応する。このような音韻構造を取るリアルタイム型の事態言明は直説法的ムードとなり、平叙文では話し手が観察したということが必ず含意され、従って「もう」は「今」とほぼ置き換え可能でなければならないが、疑問文においてはこの含意がなくなるため、「もう」の使用可能な時間的範囲は非常に拡大し、評価的ムード的に解釈されやすい。

- (34) a. ??{ 恐竜は } { もう絶滅した }
b. { 恐竜は } { もう絶滅したの } = R%

状態や過程といった未完結相アスペクトに属する（不可算の）事態の表現では、その事態を認識した（あるいは認識できなかった）時点の発話での（音韻句として独立しない）「今」「もう」「まだ」の使用に同様な対立が観察されるが、前提となる発話前後の事態の変化が確認しにくい場合には、「今」は使いにくい。「もう」は発話時直前の変化の存在、「まだ」は発話時後の変化の予測を含意する。

- (35) a. { 今 / もう / まだ サイレンが鳴っています }
b. { 今 / もう / まだ 25℃です }
c. { *今 / もう / まだ 我慢できない }

33-35 は、言及される事態が生起する時間と言及される時間が一致する、単純な時制形（近過去・近接未来・現在）であった。これに対し、基準時以外の時間に生じた事態との関連で基準時の状態を言及する場合（完了相 perfect と将然相 prospective)に、「今（は）」「もう」「まだ」は独立音韻句として現れやすい。また、現在時制の 35a-c は、「今、もう、まだ」を独立音韻句として発音すると、発話時の状況を描写する発話となる。

- (35) a'. {今（は）}{もう／まだ}{サイレンが鳴っています}
 b'. {今（は）}{もう／まだ}{25℃です}
 c'. {今（は）}{もう／まだ}{我慢できない}

これらの用法では、「今（は）」と「もう」あるいは「まだ」が共起しうる。また、時制を変えれば過去や未来の「時の状況成分」とも共起する。つまり、この場合「もう」「まだ」は基準時の前後の変化のみを含意し、この基準時を表す「時の状況成分」と共起すると考えられる。この基準時のデフォルトが発話時である。「基準時の存在」という点で、これらの未完結相アスペクト文と完了相・将然相は類をなしているといつてよいが、ただし、この場合、発話時以外に基準時を動かさないモーダルな表現も多い。

完了相は、動詞の側での表示に「～ている」という文法形式があるが、「もう／まだ」がこの語形と必ず共起するわけではない。

- (36) a. {もう}{そのことは}{忘れた}
 b. {太郎も}{今は}{もう}{忘れている}
 c. ?{太郎は}{もう}{財布を忘れている}
 d. {財布は}{もう}{忘れた}

36a では、「忘れた」に過去形が用いられるが、これがいつであるかを特定できる必要はない。この文が言及するのは、あくまでも発話時の（変化後の）状態である。完了形が用いられる三人称の 36b との違いは、36a の「忘れた」は不可逆の変化として提示されているのに対し、36b では（「もう」の有無に関わらず）現在の状態が必ずしも発話時以降不変ではないものとして提示されている点であるように思われる。36c が解釈しづらいのは、財布を忘れた結果のどんな状態に言及しているのかがわかるような文脈を欠くからである。これに対し 36d では、たとえば、現状では財布だけを忘れていて、次は携帯電話や腕時計

を忘れるかもしれない、といった解釈が可能である。完了相動詞形式を用いる「太郎は財布を忘れている」は、置き忘れられた（状態の変わらなかった）財布が存在している、という場面での発話として可能な表現であるが、同じことを「もう」で言うためには、「財布がもう置いてけぼりだ」のような、特定の何か（たとえば財布）にどんな変化が生じたかという観点での表現が必要で、この点で動詞文法形式とは異なっている。

- (37) a. {もう}{読み終わる}
b. {もう}{急がないと／急いでも}{間に合わない}
b'. {まだ}{急がなくても／急げば}{間に合う}
c. {もう}{連れて行かないよ}
c'. {もう}{連れてって}{くれないよ}

将然相は、Comrie(1976)によれば、発話時以降に位置づけられる事態との関連で発話時に言及する、完了相 perfect と対称的な（時制的）アスペクトである。37a を例にとると、発話時以降に本を紛失したとしても 37a は偽にはならない。37b/b'でも、「もう／まだ」がある場合は、間に合うかどうかよりは、現在が「間に合うかどうか」に関してどのような時点であるかの判断が命題の中心である。この場合、「間に合う」から「間に合わない」への方向性が了解されているため「もう／まだ」は相補分布となっており、この対立は冗長にみえる。37a-b は、「～（という）時」のような従属節を構成して、発話時以外の「時の状況成分」ともなり、一種の相対時制形として機能している。これに対し、37c/c'は発話者の発話時における意図／判断しか表さない叙法的表現であるが、やはり未来の事態の実現・非実現には関心がない言明である。いい加減にしないとそういう方向に向かっているよ、という現状への警告として「もう」が機能している。

- (38) a. {君は}{もう}{帰れ}
b. {もう}{泣くな}
c. {もう}{酒は}{やめた}

将然相というアスペクト形式としては分析できない典型的なモーダルな用法として、命令や禁止、当為・許容といった形式があるが、この場合も何らかの変化を含意しているものの、それが何の変化であるか、すでに起きた変化であるのかこれから起きる変化である

のかは語形だけでは判断しづらい。たとえば 38a の命令形では、「もう」が主語の状態の変化を含意するため、発話時まである程度の時間は現在の場所に滞留した聞き手への発話である、という含意があると考えられ、ドアを叩く招かれざる客を追い返すのには不適切である。38b も典型的には発話時に泣いている人に発せられるように聞こえるのであるが、しかし、「もう帰ってほしい」「もう（そんなことで）泣かないでほしい」といった、話して側の心境の変化を伝える場合にも使える表現である。38c では過去形が用いられているが、「やめた」という事象は時間の特定ができないため、事実上は発話時以降においても継続的な事態との関連での現状への言及となる。「やめる」でも「やめよう」でも実質的には変わらない。これらは、話し手が思想上実現を期待する事象との関連で発話時の状況について述べる、将然相の拡張的な用法とまとめられるかもしれない。

完了相・将然相は、すでに起きた事態、これから起きる、あるいは起きてほしい事態との関連である時点の状況について述べるという命題を構成する。アスペクトと分類されることがあるが、「時間的に位置づけられた事態との関連での時間（特定時点）の性格づけ」というその意味は、論理的に「事態の内的な時間的特性」よりはるかに「事態の外的な時間的位置づけ」に近い。このような意味を表示する副詞が「時の状況成分」の副詞と統語的に密接に関わっているのは自然なことだと思われる。

以上、「もう」の音韻構造上の位置が、近過去時制・近接未来時制の事態生起時を示す副詞と、完了相・将然相的命題の基準時の存在を示す副詞に対応するのではないかという仮説を提示した。近過去時制・近接未来時制は、Comrie(1976)が論じている通り、完了相・将然相の文法形式が派生的に取りやすい時制であり、従属節での出現時など分析対象を広げればこのような 1 対 1 対応ではない可能性もある。「もう」の出現する音韻句として、もうひとつ重要なのは、完了相・将然相的命題における、基準時を表す「時の状況成分」と構成する複合的な音韻句である。「今はもう」「もう今は」「そのときはもう」「それからもう」など、さまざまな組み合わせがある。これらも、修飾関係とは異なる何らかの統語関係をなすと考えなければならない。

4. まとめ

以上、概略的ではあるが、なるべく多種類の日本語副詞について、二語構造・二句構造・音韻句統合といった統語的隣接関係を前提とする音韻構造への出現・不出現を軸に、多義とその性質を例示した。

(39)

a. {副詞 X}~{/副詞 X/ (二語構造またはアクセント句統合)

もう(無核) ~ : {もう一人},{もう千円}

b. {副詞}{X} (二句構造)

あと : {あと}{一人},{あと}{千円も}

c. {副詞 XP} (義務的音韻句統合)

程度副詞 : {ずっと暑い}{もっと高い},{とても暑い},{ちょっと暑い},{まったく暑い}

(狭義の) 動き様態副詞 : {ゆっくり走る},{とてもゆっくり動かす}

事態生起時特定の時間副詞 : {今/もう/まだ/そのとき 色が変わる}

頻度副詞 : {やっぱり ~} cf. {また ~}

c'. {副詞 XP}~{副詞}{XP} (任意の音韻句統合)

時間関係副詞 : {ずっと{}}

語彙的(動詞的) 様態副詞 : {ゆっくり{}},{じろじろ{}},{きよろきよろ{}}

d. {副詞} (単独音韻句)

{もっと},{もうちょっと},{ちょっと},{まったく},{もう},{まだ},{やっぱり}

e. {XP 副詞} (複合副詞句)

{~よりずっと},{~のほうがずっと},{(時間句) ずっと},{(時間句) もう/まだ}

音韻句統合という共通の構造に、程度副詞、(狭義の) 動き様態副詞、事態生起時の時の状況副詞といった、異なる種類の修飾的關係が関与していることがわかる。このような構造をとらない副詞(39c',39d)が、文の他の部分とどのような統語的關係に立ち、どのような構造を構成しているかは、別の分析が必要になると考える。また、二つの隣接副詞句によって構成される構造(39e)についても考察が必要である。副詞とは異なる品詞と分類される副助詞は、同様に副詞句的構造を構成する機能語群と考えられるが、本稿では触れなかった作用域の分析で、これらの複合副詞句的構造は統一的な分析が必要になると考えられる。本稿では、モーダルな副詞については取り扱わなかったが、これとの関連で、音韻構造上独立的な振る舞いをし語順が比較的自由的な副詞が、押しなべてモーダルな解釈をうけやすい傾向があることは、一般言語学的にも興味深いと考える。統語構造上上位の語は、単独で発話を構成しやすい。発話場面・話者・発話時に即した意味を帯びることと、統語的な独立性をもつことは矛盾しない。意味的な完結性の高い要素の間に成り立つ統語關係は、補語關係や付加關係といった下位の構成的な關係とは異なるはずだという前提から出発し

た統語論もありうると思う。

日本語副詞研究は、一見多種多様な意味の違いを、なるべく統一的に簡潔に記述するという方向性をもってきたように見受けられる。この方向性は、語彙派生や意味変化など、日本語の通時態を明らかにするという点で、十分に価値のあるものだと考える。にも関わらず、ささいな発音の違いや選択制限の違いを取り上げてこの統一を分解し、殊更に多義を論ずるのは、一般言語学的な配慮に基づくものである。「副詞」という範疇は、諸言語の文法の構成要素の中でも特に個別的なばらつきが目立つ範疇である。たとえば、Ernst(2002)は、英語の副詞の大分類として、陳述 predicational、領域 domain、付加句 participant、機能 functional の4つを立てるが、文副詞（叙法副詞）から様態の副詞までを含む語彙的副詞の大分類である陳述副詞の分類基準として、程度の副詞に限定を受ける、ということが重要とする。日本語にも叙法の副詞に似た副詞はあるが、これらは「とてもたぶん」のような程度限定句を構成しない。そもそも大分類の段階で統一的な分析が成り立たないのである。

当然のことながら、日本語で副詞に分類される語群と他の言語で副詞とされる語群は一致しない。語彙レベルでもまた、同じ意味範疇をカバーする副詞があれば奇跡的といっていいと思われる。このような条件下で副詞について論じるとすれば、まず必要なのは、これをバラバラに解体して後でまた隣接のものをまとめられるような体系的な方法を見出す、ということであると考え。対照言語学的な研究や、非母語話者への言語教育においては、このことを自覚し、一旦バラバラにした副詞やそれに関連する文法要素とを、対象言語の同様な副詞的要素と関連付ける作業が必要になる。仁田氏の体系的な労作を出発点として、さらにどのような方向で分析すべきかの試論として読んでいただければ幸いである。

注

- 1) 筆者の母語である鹿児島方言では、もうしばらく、もうすぐ、もう一人ではアクセント単位として統合している。もう千円、もう二三回、もうあとの連続は方言形の存在が疑わしい。
- 2) 「あと」は「たくさん」「多く」が後続し難い点で{もう(X)}と似ているが、「ほとんど」「たいてい」など比率に関するものについては「もう」と比べて中立的に接続する。
- 3) 佐野(1998)は、比較の「ずっと」は比較マーカーとして「～より」「～の方が」を要求するとする
- 4) このほか「ゆっくり」には、「車がゆっくり三台はいる」のような状態性事象に現れ、口語で「余裕で」に侵食されつつある用法もある。

※ 音調句・句末イントネーションとその表記については、児玉望(2008)「曲線声調と日本語音律構造」『ありあけ』『熊本大学言語学論集7』1-40.参照。

参照文献

Chomsky, Noam (1957). *Syntactic Structures*. The Hague: Mouton.

Cinque, Guglielmo (1999). *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*.
Oxford: Oxford University Press.

Comrie, Bernard (1976). *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.

Ernst, Thomas (2002). *The Syntax of Adjuncts*. Cambridge: Cambridge University Press.

工藤浩(1977)「限定副詞の機能」『国語学と国語史』松村明教授退官記念論集.明治書院.

工藤浩(1983)「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』明治書院. 176-198

佐野由紀子(1997)「程度副詞と主体変化動詞との共起」『国語学』188. 112-98

仁田義雄(2002)『新日本語文法選書3 副詞的表現の諸相』くろしお出版.

仁田義雄(2007)日本語記述文法研究会(代表 仁田義雄)編『現代日本語文法』3. くろしお出版.